

短 報

群馬県産水生植物分布の新知見

大 森 威 宏

群馬県立自然史博物館学芸課

キーワード：群馬県, 水生植物, 初記録, 分布

Key words: Gunma Prefecture, Aquatic macrophytes, New record, Distribution

はじめに

群馬県の水生植物は、南東部の館林市周辺に位置する多々良沼などの湖沼において明治時代以来研究がなされ(島野 1995; 角野 1999), タカノホシクサ, ムジナモ, ガンチャモクなど現在日本において絶滅種または絶滅危惧種となった植物(環境庁 1997)を含めて多数の種が記録された(松澤 1995b)。また、尾瀬や榛名湖などの山地湖沼や湿原においても1950~1980年代に総合学術調査(Hara and Mizushima 1954)や県在住の研究者によって調査されてきた(栗田ほか 1974; 栗田・峰村 1985)。一方で館林周辺を除く群馬県の平地や丘陵地の水生植物については、県自然環境調査研究会によって藤岡市から安中市に至る地域の溜池の調査が行われた(片野 1983-1986, 1997; 片野・吉井 1987; 片野・津久井 1998)のみで、群馬県立自然史博物館にも上に述べた地点以外にはほとんど植物標本がなかった。加えて群馬県においても埋め立てや改修による生育地の破壊、水質の悪化、農薬の使用、ソウギョの放流などにより、水生植物の減少が著しく、多数の種がすでに絶滅したか絶滅が危惧される状態にあると考えられる(松澤 1995a; 片野・吉井 1987; 片野 1997; 片野・津久井 1998)。このため、従来調査が行われていなかった地域も含めた群馬県全域における水生植物の現状を把握する必要がある。

このような状況下、リュウノヒゲモが群馬県内に自生していることが新たに判明した。また、角野(1994)によってはじめて群馬県における分布が確認されたエゾヤナギモとマルミスブタの新たな産地が明らかになったので報告する。さらに、群馬県におけるヤナギスブタとミズニラの分布について新知見が得られた。本報告の証拠標本はいずれも群馬県立自然史博物館(GMNH)に収蔵してある。

1 リュウノヒゲモ (*Potamogeton pectinatus* L.: ヒルムシロ科: 図1)

リュウノヒゲモは海岸付近の湖沼に分布することが多い沈水植物である(角野 1994; 大野 1998)が、青森県(十和田湖, 蔦), 長野県(野尻湖, 秋山郷)など内陸にも分布することが知られていた(村井 1935; 横内 1983; 今井 1997)。本種は絶滅の危険性がある植物を示した「環境庁版レッドリスト」(環境庁 1997)では、絶滅危惧II類にランクされる。また、富山県では絶滅し(太田 1999), 三重県でも絶滅?とされ(レッドデータブック近畿研究会編著 1995), 千葉県では重要保護生物に位置づけられるなど(千葉県環境部自然保護課 1999), 各地で絶滅のリスクが高い種の一つである。

リュウノヒゲモは群馬県からは知られていなかったが、1999年10月17日、新田郡境町の利根川河川敷にある面積0.1ha以下の沼(36° 15' N, 139° 15' E: 海拔標高40 m)で本種の生育を確認した。自生地は利根川の旧河道から分離して形成されたとみられる止水域で、リュウノヒゲモが水深1.5mの最深部まで分布し、ほかにホザキノフサモが生育している。

2 エゾヤナギモ (*Potamogeton compresus* L.: ヒルムシロ科) とマルミスブタ (*Blyxa aubertii* L.C. Rich.: トチカガミ科)

館林市多々良沼産の沈水植物の中で、過去にヤナギモ(*P. oxyphyllus* Miq.)と同定されていた群馬県立自然史博物館所蔵標本(1938年, 船橋千代氏採集)を検討したところ、ヤナギモより葉が細く葉脈は5, 葉の先端が急に狭くなり尾状になる, 水中茎は分枝が多いことからエゾヤナギモであることが明らかになった(図2)。さらに同地のスブタ(*Blyxa echinosperma*(Clarke) Hook.)と同定されていた標本(1948年, 五味禮夫氏採集; 1954

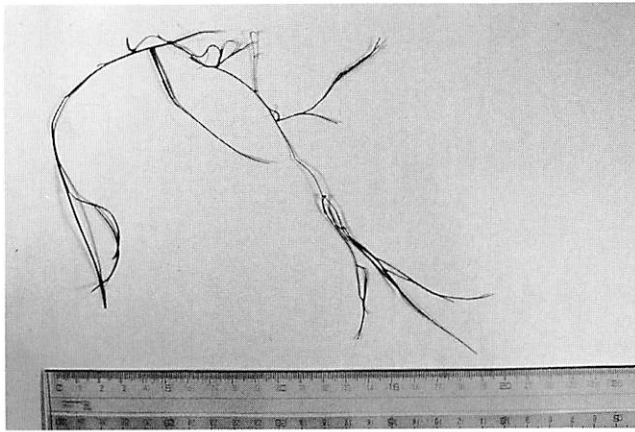


図1 リュウノヒゲモ *Potamogeton pectinatus*
(1999年10月群馬県新田郡境町産)

年、戸部正久氏採集)の中に、マルミスブタが含まれることが判明した(図3)。すでに角野(1994)は、この2種が邑楽館林地域に分布すること図に示しているが、群馬県植物誌(戸部ほか1968;戸部ほか 1987)にはこの2種の記録はない。両種の産地は明治時代以来現在まで継続的に調査・採集が行われた地域(島野 1995)であり、さらに、これらの標本は群馬県植物誌の証拠となったもので、これらの中にエゾヤナギモとマルミスブタが含まれたことから、いずれも別の種に誤同定されていたと考えられる。この2種は現在まで、群馬県在住の研究者には充分認識されていない種と思われるので、今回両種が館林市多々良沼に分布していたことを改めて報告する。ただし、両種はともに多々良沼からすでに絶滅している。このことも両種が認識されてこなかった原因の一つにあげられると思われる。エゾヤナギモは、日本では本州中部以北と北海道に分布している(角野 1994)

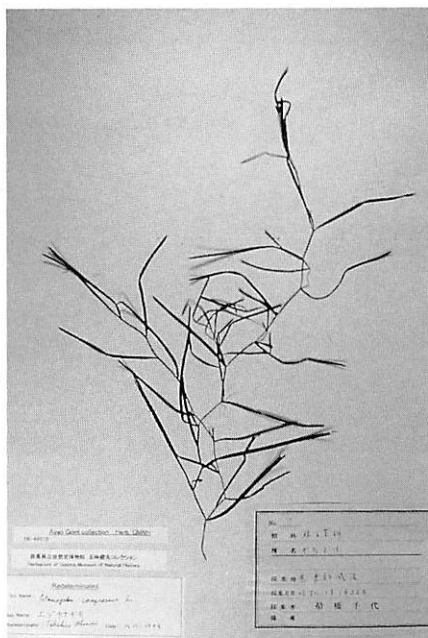


図2 エゾヤナギモ *Potamogeton compressus*
(1938年8月群馬県館林市多々良沼産：
現在絶滅)

が、関東地方における既知の産地は多々良沼以外には茨城県霞ヶ浦南岸・石岡市(角野 1994;鈴木ほか 1981)のみである。

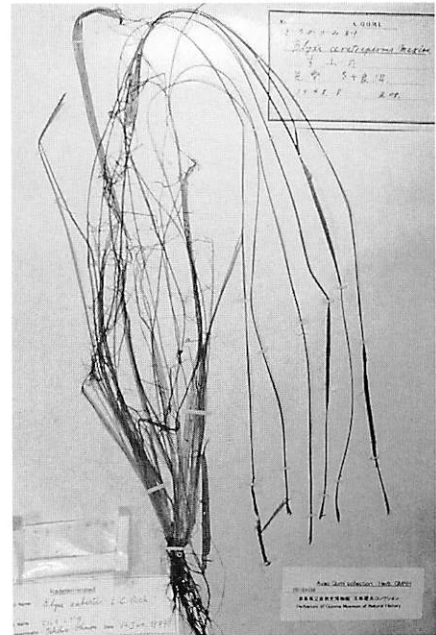


図3 マルミスブタ *Blyxa aubertii*
(1948年8月群馬県館林市多々良沼産：
現在絶滅)

3 ヤナギスブタ (*Blyxa japonica* (Miq.) Maxim. ex Asch. et Gürke : トチカガミ科)

ヤナギスブタの群馬県植物誌(戸部ほか1968;戸部ほか 1987)に記録がある産地は平野部に位置する館林市、前橋市である。さらに角野(1994)は群馬県北西部からもこの植物を報告している。角野(1994)が報告した地点には平野は存在しないため、群馬県の山間部にもヤナギスブタが分布している可能性があった。このため、1999年、群馬県北部の山間部を調査したところ、2カ所から新たにヤナギスブタの分布を確認した(図4)。2地点ともに山間部の耕作中の水田で、斜面からのわき水やため池からの漏水など、貧栄養な水により涵養されて、少なくとも9月中旬まで冠水している点が共通している。同様な条件の水田が存在する吾妻郡北東部や榛名山周辺を探索すればさらに自生地が見つかる可能性がある。

4 ミズニラ (*Isoetes japonica* A.Br. : ミズニラ科)

ミズニラは群馬県からは館林市とその周辺など県南東部及び赤城山から知られ(戸部ほか 1987)、現在も館林市と周辺地域で自生が確認されている(松澤 1995a;青木 1998)。1999年、過去に報告がない群馬県北西部にもミズニラの自生を確認した(図4)。県北西部の自生地はいずれも山間部のいわゆる谷津田のうち、山林斜面に接した場所である。図中AとBの自生地は休耕田で、休耕後も草刈りがなされている。中でもAは休耕田1筆

全面にミズニラが自生し、現在残る県内最大規模の自生地と思われる。Cの自生地は耕作中の水田の畦から耕作面にかけての部分である：

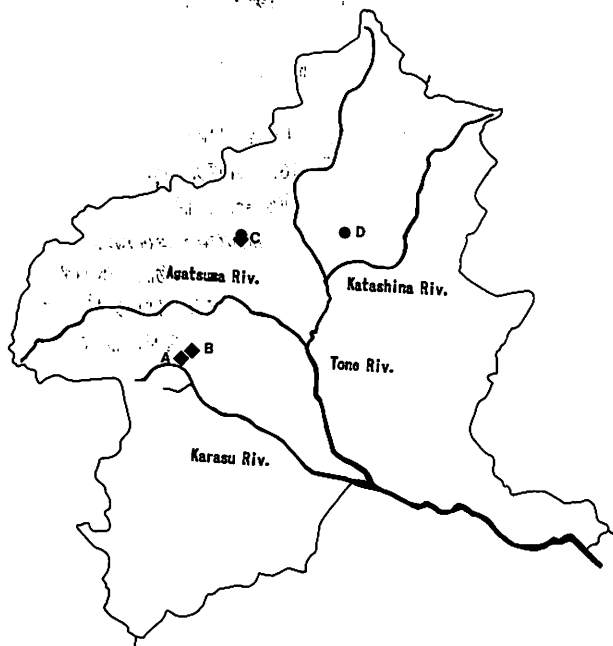


図4 群馬県北部～北西部のミズニラ(◆)及びヤナギスプタ(●)自生地 各地点の海拔標高：A(590m), B(640m), C(640m), D(510m)

おわりに

エゾヤナギモとマルミスプタは、群馬県に自生していることが認識される前に絶滅した。干拓や水質汚濁、さらに周辺の農地における除草剤の使用が絶滅の原因と考えられる。今回確認されたリュウノヒゲモの自生地は1カ所のみである。自生地の沼には釣り人が立ち入っているため、密生し釣りの障害になるリュウノヒゲモが引き上げられたり草食性・雑食性の魚類が放流されることが考えられる。また、河川敷に自生地があるため、氾濫による地形変化のほか、改修工事によって消滅する可能性もある。これらの状況を考慮すると群馬県のリュウノヒゲモは絶滅する危険性が極めて高い。水草の引き上げや密放流の監視を含め、釣り人への指導を行うとともに、河川管理者計画の中に、このような種への配慮が求められる。さらに、筆者の観察では、河川敷の沼にはしばしば廃棄物が不法投棄されることがあり、この自生地の沼に廃棄物を積載できる車両が乗り入れできないようにすることも必要であると考えられる。ヤナギスプタやミズニラは過去の調査空白域で生育が確認された。本報告の通り、群馬県内の水生植物の分布については現在不明な点が多い。加えて開発や環境の変化によりこれらの植物は絶滅の危機に瀕するものが多い。全県的な調査が求められるとともに、保全のための緊急対策、自生地周辺の住民の意識向上が必要である。

引用文献

- 青木雅夫
1998 茂林寺沼湿原の高等植物目録, 「良好な自然環境を有する地域学術調査報告書(XXIV)」, pp.76-87, 群馬県自然環境課, 前橋.
- 千葉県環境部自然保護課
1999 「千葉県の保護上重要な野生生物—千葉県レッドデータブック—植物編」, 千葉県環境部自然保護課, 435p.千葉.
- Hara, Hiroshi and Mizushima, Masami
1954 List of Vascular Plants of the Ozegahara Moor and its Surrounding Districts, 「尾瀬ヶ原」, pp.428-479, 日本学術振興会, 東京.
- 今井建樹
1997 135. ヒルムシロ科 POTAMOGETONACEAE, 「長野県植物誌」(清水建美監修 長野県植物誌編集委員会編), pp.1187-1192, 信濃毎日新聞社, 長野.
- 角野康郎
1994 「日本水草図鑑」文一総合出版, 179p.東京.
1999 沼と池の植物たち—失われた楽園, プランタ, 64: 14-20.
- 環境庁
1997 「植物版レッドリストの作成について」環境庁自然保護局野生生物課, 80p. 東京.
- 片野光一
1983 植生, 吉井町周辺の池沼, 「良好な自然環境を有する地域学術調査報告書(IX)」, pp.142-147, 群馬県林務部自然保護対策室, 前橋.
1984 植生, 吉井町周辺の池沼, 「良好な自然環境を有する地域学術調査報告書(X)」, pp.94-98, 群馬県林務部自然保護対策室, 前橋.
1985 植生, 安中・岩野谷池沼群, 「良好な自然環境を有する地域学術調査報告書XI」, pp.261-263, 群馬県林務部自然保護対策室, 前橋.
1986 植生, 安中・富岡池沼群, 「良好な自然環境を有する地域学術調査報告書(XII)」, pp.137-140, 群馬県林務部自然保護対策室, 前橋.
- 片野光一・津久井芳雄
1998 植生, 谷津田(西毛地域), 「良好な自然環境を有する地域学術調査報告書(XXIV)」, pp.25-30, 群馬県自然環境課, 前橋.
- 片野光一・吉井広始
1987 安中・富岡池沼群, 「良好な自然環境を有する地域学術調査報告書(XIII)」, pp.79-85, 群馬県林務部自然保護対策室, 前橋.
1997 植生, 谷津田(西毛地域), 「良好な自然環境を有する地域学術調査報告書(XXIII)」, pp.58-64, 群馬県自然環境課, 前橋.
- 栗田秀男・峰村宏
1985 榛名湖におけるコカナダモと在来水生植物の分布について, 水草研究会報, 20:8-10.
- 栗田秀男・峰村宏・宮原義夫
1974 第1部 尾瀬沼の湖沼学的研究(第一報) 水質・プランクトン・底生動物・湖岸動物・底質・水生植物について, 「特別天然記念物尾瀬文化財調査報告書」(群馬県教育委員会編), pp.1-70, 群馬県教育委員会, 前橋.

松沢篤郎

1995a 絶滅及び絶滅の危惧される植物, 「文化財総合調査 館林市の植物」(館林市教育委員会編), pp.90-96, 館林市, 館林.

1995b 植物目録, 「文化財総合調査 館林市の植物」(館林市教育委員会編), pp.138-176, 館林市, 館林.

村井三郎

1935 「十和田湖・八甲田山の植物」青森営林局, 207p. 青森.

大野睦子

1998 北九州の水辺に生きる植物たち 埋め立て地の植物2, わたしたちの自然史, 66:6-13.

太田道人

1999 富山の絶滅危惧植物, 「特別展 とともに生きよう! 地球の仲間たち-絶滅と共生- 展示解説」(富山市科学文化センター編), pp.23-25, 富山市科学文化センター, 富山.

レッドデータブック近畿研究会編著

1995 「近畿地方の保護上重要な植物-レッドデータブック近畿-」 関西自然保護機構, 121p. 大阪.

島野好次

1995 館林市の植物研究小史, 「文化財総合調査 館林市の植物」(館林市教育委員会編), pp.90-96, 館林市, 館林.

鈴木昌友・清水修・安見珠子・安昌美・藤田弘道・中崎保洋・和田尚幸・野口達也

1981 「茨城県植物誌」茨城県植物誌刊行会, 339p. 水戸.

戸部正久・里見哲夫・島野好次

1968 群馬県の高等植物目録, 「群馬県植物誌」(群馬県植物誌編集委員会編), pp.15-160, 群馬県高等学校教育研究会生物部会・群馬生物教育研究会, 前橋.

戸部正久・里見哲夫・島野好次・須藤志成幸・松澤篤郎

1987 群馬県自生高等植物目録, 「群馬県植物誌 改訂版」(群馬県高等学校教育研究会生物部会「群馬県植物誌改訂版」編集委員会編), pp.153-393, 群馬県, 前橋.

横内斎

1983 「信濃植物誌」銀河書房, 401p. 長野.

Abstract

Distribution notes on aquatic macrophytes in Gunma Prefecture

Takehiro OHMORI

Department of Biology, Gunma Museum of Natural History

Potamogeton pectinatus is newly recorded in Gunma Prefecture, Central Japan. This plant occurs in a riverside pond of the Tone River at Sakai Town. Specimens of *Potamogeton compressus* and *Blyxa aubertii*, collected in the Tatara-numa Pond in Tatebayashi City, were found through the herbarium survey by the Gunma Museum of Natural History.

These plants were collected before the 1950's, and are already extinct.

In Gunma Prefecture, *Blyxa japonica* and *Isoetes japonica* were newly recorded in paddyfields irrigated by oligotrophic water in the mountainous regions of northern or northwestern districts of Gunma.

大森威宏

群馬県立自然史博物館学芸課 〒370-2345 群馬県富岡市上黒岩1674-1

Takehiro OHMORI

Department of Biology, Gunma Museum of Natural History : 1674-1, Kamikuroiwa, Tomioka, Gunma, 370-2345, Japan